20 号　2015 年 4 月 5 日発行

SIGNIS　JAPAN　ニュースレター

タリタ・クム！　起きなさい！

発行：SIGNIS JAPAN（カトリックメディア協議会）
代表：千葉茂樹
発行所：〒107-0052　東京都港区赤坂 8-12-42
聖パウロ女子修道会内
TEL 03-3479-3941 E-mail：info@signis-japan.org
http://signis-japan/org/

主はよみがえられた、約束のごとく。主は生きておられる。アレルヤ！！

主のご復活、おめでとうございます。福音書には、人々を教え、病人を癒やし、弟子たちと生きたイエスの姿が描かれています。イエスを試そうとしているファリサイ派や律法学者とも意見を戦わせています。あらゆる人々と交わったイエス。そのイエスは、2,000 余年を経た今も、わたしたちの間に生き、導いてくださっています。インマヌエル、「わたしたちとともにおられる神」。

イエスがいてくださる喜びを、「アレルヤ！」とたたえながら、シグニスも、ともにいてくださるイエスを伝えていきたいと思います。

日本カトリック映画賞に『**谷川さん、詩をひとつ作って下さい。**』決定！

杉本信昭監督 / 2014年 / 株式会社モンタージュ製作・配給

授賞式＆上映会　2015年5月5日(火・祝)13：00開演　なかのZERO　小ホール

『谷川さん、詩をひとつ作ってください。』に日本カトリック映画賞

ドキュメンタリー映画『谷川さん、詩をひとつ作ってください。』が、第 39 回日本カトリック映画賞に選ばれ、授賞式と上映会が来る 5 月 5 日（火・祝）13 時より、東京・なかの ZERO 小ホールにて行われます。本作は、詩人谷川俊太郎さんが東日本大震災について書いた詩「言葉」を入り口にして、様々な土地で暮らす人々の日常生活を追います。福島県相馬市の女子高校生、大阪釜ヶ崎の日雇労働者、東京の農家、長崎諫早湾の漁師、青森の霊媒・イタコ。映画に登場するこれらの人々にはそれぞれの苦しみと喜びがあり、生活に根差した言葉があります。諫早湾の厳しい現実の中で漁業を続けている漁師が、苦労を共にしてきたもう若くはない妻に言います。「結婚してから惚れた」暮らしの奥底から生まれるこうした言葉に果たして詩は向き合えるのか。「自らの言葉で語る人々」と「自らの言葉を探す詩人」との極めてスリリングな「言葉」と「詩」のやりとりがこの映画の魅力です。映画を観て私たちもまた他人の手垢に染まった言葉ではなく自らの言葉を探し始めるのではないでしょうか。観客は日頃発する自らの言葉について改めて見直すことになります。観る人それぞれに言葉についての発見をもたらす、幅のある味わい深い作品です。

授賞式には、幸田和生司教（シグニスジャパン顧問司教）、晴佐久昌英神父（同・顧問司祭）も出席、上映後は杉本信昭監督、プロデューサー小松原時夫氏と晴佐久昌英神父の鼎談が行なわれます。

シグニス平和賞創設。授賞作に映画『石川文洋を旅する』が選ばれる

映画を観て感動すると、その感動を他の人にも伝えたくなります。私たちシグニスのメンバーはそんな思いで毎年日本カトリック映画賞を選んできました。第 39 回日本カトリック映画賞最終選考に残った 2 本は、『谷川さん、詩をひとつ作ってください。』と『石川文洋を旅する』でした。両作品とも考えが観る前と後では変わってしまう程の力作です。カトリック映画賞は僅差で『谷川さん、詩をひとつ作ってください。』に決まりましたが、メンバーからは、『石川文洋を旅する』（大宮浩一監督）も、ひとりでも多くの方に見ていただきたいという声が上がりました。

この映画は報道写真家石川文洋さんの 50 年を追うドキュメンタリーです。石川さんは戦場カメラマンとしてベトナム戦争を世界に伝え、今はふるさとである沖縄の現実を撮り続けています。
戦禍に脅えるベトナムの少女、震えながらこちらを凝視する沖縄の幼児の映像。戦争の実相が迫ります。日本が世界の戦争に介入しようとしているのではないかと危惧される今だからこそ、多くの方、特に戦争を知らない若い人たちに観ていただきたいという強い思いから、シグニス平和賞が創設され、最初の授賞作品としてこの映画が選ばれました。

チケット：1,000 円/高校生以下、障がい者（含介助者 1 名）800 円
販売所：聖イグナチオ教会案内所、スペースセントポール、サンパウロ書店（四ツ谷駅前）、高円寺教会天使の森
メール・電話での申込み：SIGNIS JAPAN 事務局　info@signis-japan.org　/　TEL 090-8700-6860（担当 大沼）
※「石川文洋を旅する」の上映はありません。　★ 皆さまのお越しをお待ちしております。★

第21回　インターネットセミナー開催報告

２月２８日（土）第２１回「教会とインターネット」セミナーが聖パウロ女子修道会ホールで行われました。参加者は約 50 名、後半のトークセッションは３０名くらいでした。

今回は、札幌教区の勝谷太治司教に「インターネットが拓く新・福音宣教」というタイトルで基調講演をお願いしました。ご自分のインターネットとの関わりを振り返られながらお話しされたなかで特に興味深かったことは、司教様の Facebook（以下ＦＢ）に青年の友だちが多いこと、教会には行っていなくてもネット上では繋がり続けている、というところです。また、このネット上に生きている青年たちの司牧というのは新しい課題ではないかと指摘されたことでした。

後半のトークセッションでは、まず、青森の佐井さんがご自分のホームページやＦＢでの発信について報告されました。佐井さんは毎日「今日の恵み」をＦＢ上で分かち合っておられます。つぎに、昨年９月から始まったインターネットラジオ「カトラジ！」の報告がありました。カトラジ！に繋がっている青年たちの活動がとても頼もしく思えました。さらに、昨年の神戸のセミナーでの片柳神父の講演のビデオの中から「ソーシャルネットワークの使い方」についての部分を紹介しました。

シグニス からのレポートでは、ＦＢでの福音宣教を意識した使い方のいくつかの実例を紹介しました。「松戸教会」、「ドン・ボスコの風」、そして個人での発信について事前にアンケートをとったものを紹介しました。これは シグニスの FB 上で見ることができます。フリートークの時間では、次のような意見が出されました。

＊ソーシャルネットワークの世代別の使い方を意識する必要がある。FB は特に今の若い人には届かないのではないか。
＊FB 上では人の顔写真を安易に載せてしまうなど、プライバシーの配慮が足りないのではないか。
＊青年たちがネットの世界にハマルのは、ネット世界への逃避ではないか。
＊でも引きこもりの青年がネット世界ではいきいきと発言している例もある。

なかなか興味深い発言が多く、中身の濃い集まりだったように思います。さてこれを次にどのように発展させていくのか、シグニスの手腕が問われます。（土屋）

あの日を忘れない　～2011年から4年目を迎えて～

忘れないで！　　カトリック一本杉教会　岩井　誠　（仙塩８教会広報委員会）

東日本大震災から４年が過ぎました。

今、仙台の街中では、大震災の跡形もありません。街中を歩く人々も、まるであんな事がなかったかのように平常に戻っています。

津波による被災地では、地盤沈下した土地のかさ上げ工事や新たな堤防工事で、震災前とは景観が全く変わっています。

一方で、災害復興住宅の建築の遅れから、いまだに狭い仮設住宅で暮らしている方々、運よく復興住宅に移れたのに、周りに知り合いもなく、かえって孤立して閉じこもってしまう高齢者。

それにもまして、福島の方々は、大地震・津波・福島第１原発の放射能被害・風評被害と４重の被害に苦しんでいます。避難区域が除染されたからと避難処置が解除されたとしても、幼い子どものいる家庭では、不安がありいまだに戻れないでいる家庭や、仕事のため父親だけが戻り、家庭がバラバラに暮らしている現状もあります。

釜石や、気仙沼、南三陸町などでは、漁網の修理や牡蛎、ホタテの養殖で人手が足りず困っています。ボランティアの手を借りて何とかしのいでいたのですが、ボランティアで訪れる人も減少しています。

いつになったら以前の平穏な生活の戻れるのか予測すらつかず、不安の中に生活している現状です。

大震災直後は、全国から多くのボランティアが訪れ、様々な活動をして被災地の復興に力を振るってくださいましたが、２年３年経つうちに、ボランティアグループも引き上げ、個人的なボランティアもめっきり減っています。

日本のカトリック教会の大震災被災地支援体制は、オールジャパンの取り組みで活動を続けています。さいたま教区がいわき市に、札幌教区は宮古市に、東京教区（ＣＴＶＣ）は南相馬市に、長崎教区は大槌町に、大阪教会管区は大船渡市に、それぞれベースを設置して支援を続けていただいています。

この取り組みは、2021 年（大震災から 10 年）まで続けられるということです。

３月 11 日前後には、テレビや新聞で被災地のことが報道されますが、それ以外の日は、ほとんど報道されなくなってきました。安倍首相は、「被災地に復興は最優先課題だ」と言うものの、最近は、もっぱら集団的自衛権のことに忙しいらしく、被災地のことは、まるで忘れたようです。

（次のページにつづく）

写真①：仮設の方々と一緒に作った「仮設七夕飾り」

被災した方々にとって「忘れられること」ほど辛いことはありません。私たちは、常に心を向け、寄り添い、キリストの愛を証し続けて行きたいと思っています。

（注）「仙台中央地区広報委員会」は、「仙塩８教会広報委員会」に改名されました。

写真②：仮設集会所でのクリスマス会
※写真は、どちらも、カリタス若林ＳＣ（サポートセンター）、一本杉教会・畳屋丁教会・西仙台教会合同で仙田氏市若林区新井東通にある仮設で実施したものです。

「生活を変えていますか」と問われて　　三上 一雄　（CTVC　カトリック東京ボランティアセンター）

カトリック船橋学習センター「ガリラヤ」はセンター開設以来、積極的に学習活動をすすめているようです。福島のことを学ぼうと、私たちカトリック東京ボランティアセンター（CTVC）にも被災地のこと、ボランティアとして学んだことなどを話す機会が与えられ、感謝しています。

福島の４回シリーズの３回目に福島県・白河市で傾聴を主に、仮設住宅の被災者訪問を続けておられる「白河みみずく」代表の金澤弘子さんのお話を伺いました。

福島第 1 原発事故後の福島の実態の写真を示しながら生々しく報告して、一段落ついた時の発言が「皆さんは事故後、具体的にどのように生活を変えましたか」でした。

この時の受講者は会議室がほぼ満席でしたから 40 人はおられたと思います。この問いかけを後ろで見ていた CTVC のスタッフが、居合わせた全員といってもいいくらい皆さん首を低くしていたと表現してくれました。

私も首うなだれた一人です。金澤さんは、私たちボランティアに「福島の電気は東京の人が使うために作られているだから」と怒ります。首うなだれる参加者を前に、どんな思いを抱かれたのでしょう。

私は、最近は足が遠のきましたが、毎週金曜日の官邸前集会に参加してきましたし、反原発集会には殆ど集会現場に行っていますが、金澤さんにこう問われて、原発反対の声を挙げ、集会に参加し、学習もしているけれど、基本的な生活の質は事故前と変わっていないなあと気づかされました。原発反対とか、九条守れと言っていれば、なんとなく、これで十分だ、自分は現代的課題の先端にいると錯覚して、あるいは自己満足に陥っていたと恥ずかしくなりました。

私は決して集会に参加すること、声を挙げることを非難しているのではなく、社会を変えると同時に、私自身も毎日の生活の中で人間らしい生き方、暮らしとは何かと考え実践していかなければと考える一人です。私たち世代は「玄関先までの民主主義」といって、ダブルスタンダードの生き方を揶揄したことを思い出します。
因みに、その時は答えませんでしたが、我が家では事故を機に電気ポットをやめて、薬缶でお湯を沸かしポットで保温すること位しか生活を変えていないことを申し添えます。「社会が大きく変わらなくても私を変える」の視点は大切だと思います。

賛助会員募集

ご一緒にメディアを通して福音を伝えていきましょう！

私たちSIGNIS JAPANの活動をサポートして下さる賛助会員を募集しています。
会員の方には、ニュースレター「タリタ・クム！」（年3回発行）をメールまたは郵便にてお届けする他、今年も賛助会員と共に捧げる感謝のミサを東京地区で予定しています。詳細は賛助会員の皆さまにご連絡させていただきます。

年会費一口　3,000 円。ご入会いただける方は、氏名、住所、連絡先を下記までお知らせ下さい。
どうぞよろしくお願いいたします！
〒107-0052　東京都港区赤坂8-12-42　聖パウロ女子修道会内　SIGNIS JAPAN　/　info@signis-japan.org
会費およびご寄付は、下記へ振込みをお願いいたします。
銀行振込　三菱東京UFJ 銀行　六本木支店 普通　1679019　　SIGNIS JAPAN　代表　千葉茂樹
郵便振替　口座番号　00100-0-594547　　口座名称　SIGNIS JAPAN　代表者　千葉茂樹

★お知らせ　賛助会員と共に捧げる感謝ミサ★
日時：2015 年 7 月 20 日(月・祝)13 時より
場所：聖パウロ修道会　若葉修道院　新宿区若葉 1-5
司式：晴佐久昌英 神父（シグニスジャパン顧問司祭/カトリック多摩教会主任司祭）
※ミサ後に親睦会がおこなわれます。